

◆ 展示品から 「名」と「号」

「号」とは、本来他人が相手を尊敬したり敬ったりして、その相手に関わりの有る別の呼び方をするものである。

号には、「萬屋」等の屋号や「春風亭」等の芸号、或いは画家の画号、書家の書号等々があり、これらは一種の職業的別名、つまり芸能人の芸名と同じであれば、堂々と名乗っても何ら問題無い。

問題は「雅号」である。雅号は職業的なものではなく、それこそ人様が名を呼ぶのを憚って呼んでくれるもので、自らこれ見よがしに名乗るものではない。まして私信に書くなど、愚の骨頂である。

例えば、司会者が「ただ今平沼機外先生が到着されました」と言っても、本人は決して「機外」とは言わず、「ただ今ご紹介賜りました平沼騏一郎です」と名を名乗るのである。

そこで、ここに呈示した大木氏の七言対の書幅二本を見比べて頂きたい。一本は「天籟」と雅号を書し、一本は「大木遠吉」と名を書してある。名を書した方には、「為安田君」との為書きがあり、号の方には何も無い。

恐らく大木氏は、為書きの有る方は、安田君に宛てた私信に等しいとの判断から号では無く本名を記されたのであろう。同じ書幅であっても、それが如何なる性質の品かに基づき、名と号を使い分けている点は、漢学の教養に依拠した大木氏の高見識を示すものであり、「流石である」と感服せざるを得ない。

たかが「号」、されど「号」である。その使い方一つに因って、その人の見識の高さと教養の深さを示すものにもなれば、逆に無知と無教養をさらけ出すものにもなる。故に「号」の使用には、慎重であらねばならないと自戒するこの頃である。

(中国学科教授 中林史朗)



◆ 展示品紹介

左下方に「天籟逸史」の自署、その下に陰刻印「大木遠」、陽刻印「天籟」の落款印を押す浜口俊裕架蔵の本軸は、南宋の詩人于石の「西湖」と題する七言律詩「西湖勝概甲東南。滿眼繁華今几年。鐘鼓相聞南北寺。笙歌不斷往來船。山園花柳春風地。水浸樓台夜月天。士女只知遊賞樂。誰能軫念及三邊。」の第五句と第六句「山園花柳春風地。水浸樓台夜月天」によっている。三方を緑豊かな山に囲まれた西湖は、中国浙江省杭州市の代表的な景勝地である。転句に相当する部分を書写する二行は、「山」「水」・「風」「月」・「地」「天」を対比させ、また春夜の湖面上空に満月が懸かる景を「春」「夜」の対置で切り取り、西湖春夜の浪漫的幽艶な至上の風情美を謳う。

(大東文化歴史資料館運営委員・日本文学科准教授 浜口俊裕)

◆ 展示品紹介

第一句の「夢回春草池塘外」は、朱熹（南宋の人）の「偶成詩」に「少年易老學難成、一寸光陰不可輕、池塘春草夢、階前梧葉已秋聲」とあり、第三句の「未覺池塘春草夢」を踏まえた句である。朱熹の「偶成詩」は人の一生はあっという間に過ぎ去ることを述べたものであり、第三句は「若かりし頃の楽しみなどはあっという間」という意で、遠吉も朱熹と同様の青春時代の回想を述べたものと思われる。第二句の「詩在梅花烟雨間」の「烟雨」は「煙雨」のことで、雨に煙っている様子を言い、「梅花烟雨間」は梅雨の頃を言い表したものの。すなわち第二句は「詩を梅雨の頃に詠じた」という意で、第一句と合わせて解釈すれば、「若かりし頃の楽しみなどはあっという間に過ぎ去り、(晩年の)今は、梅雨の降りしき中で詩を詠じている」という意味になるのか。因みに、『南史』謝惠連伝に、謝靈運（南朝・宋の人）が詩句を考えていたが終日いい句を思いつかず、その夜、夢の中で族弟の恵連に会い、たちまち「池塘生春草」の句を得たという故事があり、謝靈運の「登池上楼詩」にこの句が入っている。朱熹の「池塘春草夢」は謝靈運の「池塘生春草」を借りた可能性が高い。

(大東文化歴史資料館運営委員・文学部中国語学科准教授 吉田篤志)

